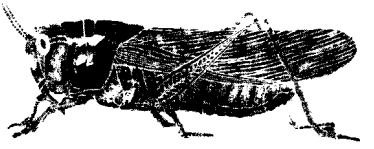
黯(くら)い足音

小檜山 博

い足音

小檜山博



鬱(くら)い足音

一九七九年一月一五日　第一刷発行
一九七九年四月二五日　第三刷発行

定　価　八八〇円

著　者　小檜山　博

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部　二三〇―六三六一
　　販売部　二三八―二七八一

印刷所　中央精版印刷株式会社
　　株式会社美松堂印刷所

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1979 H. KOHIYAMA, Printed in Japan

0093-772177-3041

あとがき

ぼくが生まれ育ったこの北海道の大地は、開拓のために流れた人間の血と涙で真っ赤だ。それはまだ乾いていない。土の底へ沈んでしまわないうちに、すくい上げてみたかった。

ここにおさめられた小説ができる過程で受けた編集者のお力添えや助言の量は、数えあげる限界を超えてしまった。まだ謝意の仕方さえ思いつかない。

昭和五十三年十二月

小檜山　博

目次

黯い足音……五
イタチ捕り……七
丸太流し……一三
血痕……一五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　小口益一

黯(くら)い足音

黯(くら)い足音

晩飯は昨夜と同じ米一割に麦九割の飯に、味噌汁と目刺しの焼いたの、それにタクアン二切れだけだった。実の入っていない味噌汁は塩汁に近かった。幅四尺に十五尺くらいの細長い板に木の脚を打ちつけた飯台のまわりに立って貪り食う。

食い終わると、土間から二尺ほど高くなっているゴザ敷きの寝間へ腰かけて地下タビを脱いだ。左足の踵の擦り傷が膿んでいて、タビに粘った。右足の親指の爪は紫色になり、縁の溝へ血がこびりついていた。作業中、落石につぶされたところで、歩くと痛みが頭の芯へ刺さった。軀をゴザの上へ砂袋でも置くようにして横たえる。動くたびに、肩や腰の関節が熱を帯びて疼いた。

手足を投げ出して寝転がっている百人近い土工夫たちの、裸の腹がばらばらに波打つ。十七歳くらいの少年の閉じている瞼が、小刻みに痙攣している。泣いているのかもしれない。壁にもたれて座っているソバ屋の出前持ちだったという青年は、頭を深く胸へ垂らして時おり濁った音をたてて鼻汁を啜る。マッチ棒で歯の隙間を突つく中年男の眼は、暗い天井のひとところから動かない。赤い褌一枚になって趺坐をかいている六十歳くらいの痩せた老人が、おれの方を見てニタッと笑った。頭がおかしいのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

百二十畳ほどの土工部屋にランプは三つしかなく、黒い靄が立ち込めた感じに暗い。部屋中に蒸れた汗と小便の饐えた臭いが混じってむかつく。

静かだった。土工夫同士が喋るのは禁じられていた。土間で、ドラム罐を改造した薪ストオブが山鳴りに似た音をたてて燃えている。五月だったが、山奥の谷間に建っているこの小屋の裏には、まだ汚れた残雪があってうそ寒かった。

時おりストオブの中から、生木のはじけ裂ける鈍い音が聞こえる。そのたびに下っ腹がずきずきした。煙筒はまっすぐ上へ伸びて屋根に突き刺さっていた。天井板がないため、屋根を支えて縦横に並ぶ太い梁が、軀を押しつぶしてくる感じに見える。

壁板と屋根の境めに、横に細長い窓がついている。この部屋にあるただ一つの窓で、背伸びして手を伸ばしても届かない高さだ。縦一尺、横二尺くらいの窓枠には、タル木が五、六本、格子になっていた。逃亡を防ぐためだ。外側には屋根の庇が突き出ていて、一日中、空は見えなかった。

眼をつぶると、また妻の香代の泣き伏している姿が浮き出た。

——あんたと子供の顔ばっかし思い出してたのに。

見上げてくる香代の涙まみれの顔を、おれは喚きながら殴った。四日前のことなのに、何年も前に見た光景に思える。

朝、出がけ香代に、残業で遅くなるからな、と言った。無理せんでよ？　と香代が語尾を上げた。寄せた眉の上に小さな窪みができると、三十歳には見えなかった。小柄な軀をくるんでいる、つぎだらけの紺の絣の着物を視界から押し出す。

おれは不況のあおりで倒産しかかっている小さな印刷工場で活字ひろいをしていた。その前にいた家具の製作所はおれが入って一年半でつぶれてしまい、間借り先の大家が見つけてくれた印刷屋へ就

職してからまだ一年たらずだった。給料は毎月、予定より一週間も遅れ、やっと支給されても半分ほどしか入っていなかった。香代は大家の紹介で、近所から縫い物の内職をもらってきては夜遅くまで針を動かした。彼女は昼食を抜いていた。いくら食べるように言っても、腹がすかないからと笑った。うつむいたあと口尻がひくついた。三歳になる女の子も飴を欲しがらなくなっていた。四畳半と三畳だけの借間は、部屋代が半年もたまっていた。

しかしその日も、おれは残業からはずれた。希望者が多いため籤引きになり、老いた喘息もちの文選工に当たったのだ。帰って部屋の戸を開けると、眼の前に大家がこちらへ背を向けてしゃがんでいた。焦げ茶色をしたメリヤスシャツの下から剝き出た彼の裸の尻が、ゆっくり動いていた。その下から白い脚が二本、畳に伸びていた。爪が短く切ってあった。

たくしあげられた着物が腰のあたりで両脇へ広がり、着物の紺と襦袢の白が波形にからまっていた。仰向けに寝ている香代の顔は、大家の軀の陰になって見えなかった。

おれは大声で喚いた気がする。しかし頭が沸騰して耳鳴りがし、声が出ているのかどうかさえわからなかった。

大家が褌を股へくぐらせながら、ふん、ちゃんとゼニ持ってきやがれ、というようなことをぶつぶつ呟いて出て行ったあと、おれは香代の顔を殴った。手のはじける音に逆上して、また手を振る。それからやみくもに腹や股を蹴りつけた。畳へ転がった香代は、頭を両腕で抱えて軀を芋虫みたいに丸めた。泣き声の合い間に、部屋代はいらないからって言うもんで、と口ごもった。二カ月前からだと言った。おカネがないでしょ、という香代の顔を唸りながら叩く。起きてきて泣き出した子供の頭も、拳で殴った。

玄人土工や仕事の上手な土工が十五人ほどいる中飯台の入浴が終わって、下飯台の番だった。おれもまたずぶの素人ということで、老人とか作業能率の上がらない者だけ集めた七十人の下飯台に入っていた。上飯台に属している親方や世話役、それに帳場と棒頭は、食事前に風呂を終えていた。

週番が飯台の脇にある風呂場の入り口で、用意、入浴、という掛け声を繰り返しはじめた。ほとんど怒号に近い。裸になって並んでいる土工夫たちが、掛け声のたびに五人ずつ風呂へ入ってゆく。しかし五分たつと、出浴、と言われて小走りで飛び出してくる。首や脇腹に石鹸の泡をつけたままの者もいた。入っている時間より、裸で待っている時間の方がずっと長かった。風呂場でも、土工夫同士が喋ることは禁じられていた。

褌ひとつで壁ぎわに寝転がっている土工の間から、お互いの出身地を囁き合うひそひそ声が聞こえた。出入り口そばの、風呂屋の番台に似た見張り台にいる棒頭の顔がこちらへ向き、近くにいた十人ほどの棒頭の中から一人だけが歩いてくる。上半身を左右へ揺すりながら、モッコをかつぐ六尺ほどの棒で肩を軽く叩いている。昼間の作業の監督や夜の土工監視に、必ず持ち歩いている棒だった。

棒頭は途中で半纏の前を大きく開き、真っ赤な胴巻きを剝き出しにした。

――くっちゃべったのはどいつだ。

囁き声は消えていて、老人が喉にからまった痰を剝がそうとする濁った音だけが残った。棒頭が、片手に持った棒を頭上で一度、振り回してから板壁へ叩きつけた。荒削りの厚板が太鼓のように鳴って、棒をはじき返した。

首のまわりへ重い湿気がまとわりついてくる。拭った手のひらがイカの脂でもくっついた感じにべとついた。

土間の棒頭は両側のゴザの上にいる土工夫を交互に睨み回したあと、肩を大きく揺すって戻りはじ

める。彼の眼が、おれの横に寝転がっている男の顔で粘った。昨日の作業で左足を捻挫し、きょうはモッコかつぎからはずれてトロッコへ土砂積みをした土工だ。黒い皺にまみれた小さな顔と灰色に濁った眼つきは、四十過ぎだった。

――こら呉服屋、飯くったか。

親方をはじめ世話役、帳場、棒頭など部屋の幹部は、土工夫を呼ぶのに名前ではなく、ここへくる前の職業で呼んだ。偽名を使う者が多いためらしかったが、以前の職業のほうもほとんどの者が出まかせを言っている様子だ。おれは屑屋になっていた。

――雑炊たべました。と呉服屋がこたえた。

――なんだてめえ、その言いかた。おれは飯をくったかと聞いたんだぞ？　野郎さからう気だな？

棒頭の肩にあった棒が浮き、薄暗いランプの光をはじいて呉服屋の背中へ飛んだ。肉を打つ鈍い音がつづいた。鼓膜へ重い呻き声が刺さってきて胸が沸き立つ。呉服屋の軀はかたつむりのように丸まっていた。三十半ばの飯台取締と二、三人の棒頭が白い歯を見せながら走ってくる。ぶちのばせ、とか、なめやがって、などと喚いている。弾みのある嬉しそうな声だ。

彼らは呉服屋を土間へ引きずり降ろすと、こも包みでもほどく手つきで衣服を剝ぎ取った。褌も紐ごとむしった。助けてくれ、助けてくれ、というかすれ声が土間を這った。肉と土のぶつかる湿った音がつづいて、胃が痛む。

棒頭の一人が、踊り上がって天井の梁へ細引きを投げる。梁に回った綱の一方の端は呉服屋の両手首に縛られていた。ぶら下がった丸裸の呉服屋が、屠殺肉のように揺れる。頭が後ろへ反り、顔が自分の両手を見上げる格好に上向いた。

飯台取締がストオブの戸を開けて燃えている薪を一本つかみ出し、呉服屋の股に近づけた。まわり

で眺めている男たちの顔が赤く染まり、眼や口が溶け落ちる感じにゆらめく。歯が炎色に光った。呉服屋が腰をわずかに後ろへ引きながら、やめろ、やめろ、とかすれ声で呻く。

おれは眼を閉じて軀を固く縮めた。皮膚の裏側が虱でも這うように疼いた。陰毛の焼ける音が耳へこもった。引きつった唸り声が長く伸びる。

暗がりの中へ幹部たちの干涸びた含み笑いが漂った。それから彼らの部屋へ向かって歩きはじめる気配がした。眼を開けると、飯台取締が薪で一度、呉服屋の腹を叩きつけ、それをストオブの中へ投げ込むところだった。炎に照らし出された顔には眼も口もなく、ただのっぺりと赤かった。

棒頭の一人がおれたちを見回して、こらあ、よっく見とけよ、と怒鳴った。声に酒の酔いがしみ出ていた。

週番の号令で、それぞれが自分の蒲団を敷く。親方から高い料金で借りている蒲団だった。綿が隅の方へ片寄っていて、布だけのところが多かった。敷き方は、十人ずつ同じ方向へ頭を並べるように決められていた。敷き終わると、壁ぎわへ重ねてある十五尺ほどの角材を枕の代わりに置く。家の柱に使う材木で、一本に十人が頭を乗せて寝た。そして朝の三時に、週番が角材の端をカケヤと呼ぶ大型の木槌で叩いて土工夫を起こすのだった。

土工部屋の方に吊してあるランプが消され、見張り部屋のランプだけが浮き出る。ストオブの燃える音が次第に小さくなり、軀が地の中へ沈んで行くような気がする。暗がりの中に、天井から吊り下がった呉服屋の軀が白っぽく浮いた。時おり、水、と呻く。声というより、つぶれた鞴から洩れる空気の音に似ていた。

おれは鼻まで引き上げた掛け蒲団の下で軀を丸め、膝を抱えた。鼻腔に饐えた汗の臭いが満ちた。あちこちで寝返りをうつ気配がし、闇が重く動いた。誰も眠っていないようだった。しかし呉服屋に

水を持って来てやる者はいない。ぐるになりやがって、と殴打されるだけだ。

おれが連れてこられた日の晩にも、同じような土工夫への見せしめがあった。脚気で作業を休ませてほしいと申し出た酒屋が裸にされ、並べた薪の上に正座させられたのだった。酒屋は膝の上へ米俵を乗せられて気を失い、同じ作業をしている二人の土工夫が土間へ額を擦りつけて許しを願った。しかし一人は棒で前歯を折られ、もう一人も左耳の付け根を半分ほど裂かれた。酒屋は深夜、外へかつぎ出されて、それっきり戻らなかった。

見張り台に座っている棒頭が濁った咳を繰り返す。肺病やみの音だ。台の脇にある小部屋では、夜中に見張りを交代する男が酒を飲んでいるはずだった。ほかの連中はもう寝てしまったらしく話し声も聞こえない。見張り台のすぐ横にある戸には、南京錠が二個も下がっている。この小屋から外へ通ずる唯一の出入り口だ。戸の外につながれている軍用犬は小馬ほどもあって、おれたちを見ると鎖を切りそうにいきり立つ。

呉服屋の軀は動かない。暗いために胸や腹の浮き沈みも見えなかった。死んだのかもしれない、と思う。おれは彼の方へ背を向けると、さらに深く蒲団へもぐった。背筋に貼りついた寒気が取れない。小便に行きたかったが朝まで我慢することにする。風呂場の横にある便所も幹部と土工夫は別になっていた。土工夫が使用する方は、しゃがんでいても腰から上が見張り番から丸見えだった。

棒頭の寝ている部屋の後方が世話役や帳場の部屋になっていて、親方はさらにその奥に住んでいる。この飯場の中で親方だけが妻と一緒だった。ただ、ここの仕事の元請け会社が札幌にあるため親方が部屋にいることは少なく、おれはまだ一度しか見ていなかった。彼は頭も頂上まで禿げあがった五十近い男なのに、妻の方は二十歳くらいの少女だった。時おり奥から、ミホ、ミホ、とやわらかな声で妻を呼んでいるのが聞こえてきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com